

2013年

望月洋史 個展

「森の人・獣ーうすきみ」

好文画廊

個展雑感

月刊 《水墨画》 2014年3号

望月洋史

昨年12月3日から8日まで、東京・日本橋浜町の好文画廊で個展を開いた。「森の人・獣ーうすきみ」のタイトルで、今回もオランウータンと狼を墨で23点ほど。絶滅危惧種である彼らの心の裡に寄り添いながら。

オランウータンを自然色麻紙、狼を雲肌麻紙と紅星牌で描き、紅星牌以外はドーサを引き、スケッチを基に床に寝かせて、大小の筆や刷毛を10本ほど用いて、紙の裏から表から墨をぶつけるようにして描いてゆく。

墨やニカワが飛び散り、生じる飛沫もおかまいなし。浦上玉堂ではないけれど、六法を知らず、ただひたすら紙背に入ることだけを念じて描いている。

調子づく時は、飛沫などの偶然がすべて予定調和となって進んでゆく思いがして、身体性と絡み、私にとってはそこが墨の最大の魅力だ。

大画面なので、途中は全体が見えているようで見えていない。だから、筆の終えどころは第六感に頼るしかない。よし、と思って初めて絵を壁に貼り付ける。「あ、ここが描き足りないな」と思い、筆を付け加えると失敗することが多い。理性で絵作りが始まるからである。だから描き足りないところは眼で補えばいいと、勝手に思っているのだがどうだろうか。

なぜ、かくも規制が働くのか、自分でもよくわからない。しかし、それもまたストイックな墨ならではの魅力だと思っている。

今回、七年前に描いた寺の《龍画》の多数の習作、五×七尺の雲肌麻紙の裏に幾枚も描いた。龍が裏から滲み出て、サンドイッチされた表現からは、無意識の領域にまで思いを馳せることになり、次に繋がるのではと期待を寄せている。

